ベルンハルト・シュリンクの小説『朗読者』

The Novel“The Reader” of Bernhard Schlink

小坂　節二[1)]

Setsuji KOSAKA

Abstract

Why does Hanna commit a suicide? This is our question. In the prison Hanna learns letters and comes to be able to read books, with the aid of the cassette tapes sent by Michael. She begins to read literature on concentration camp. She overcomes her illiteracy and moral illiteracy. She has no hope in the world outside of the prison. The prison is, as it were, a convent to Hanna. Michael is a bridge from a convent to the world. Hanna was disappointed with the rejecting attitude of Michael. This is a trigger to Hanna's suicide. The main reason is to have recognized the guilt of her past.

１．　はじめに

ナチズムの問題はいまだドイツ国民に大きな影を落としている。ドイツ人に対し、いまだに「あなたはナチスの時代に何をしていましたか」と問うことはタブーである。ほぼ全国民がナチスに従ったのであるから。また、中世から東部地域に殖民し、東欧に溶け込んで暮らしていた 1400 万人のドイツ人が、ナチスの暴虐の後、追放されてドイツに逃げ戻り、その中の一部のドイツ人が奪われた資産の保障や返還を求める訴訟を起こしたのが、2006 年 12 月である。またスイスでも、迫害されたユダヤ人の財産がスイスの銀行に眠っているとして、アメリカ在住のユダヤ人団体から返還訴訟を起こされ、スイスの銀行が 10 億ドル余りを賠償したのが、2008 年 6 月である。ヨーロッパにとっても、第二次大戦の処理は未だ終わっていない。

1995 年ベルンハルト・シュリンクの小説『朗読者』が発表され、注目を集め、世界各国の言語に翻訳され、ベストセラーになった。2009 年には映画化され、大きな話題となった。

舞台は、1958 年のハイデルベルクとおぼしきドイツの町。主人公は 36 歳の女性ハンナと 15 歳の少年マイケルである。マイケルが、通学途上具合が悪くなったところをハンナに助けられ、そこから二人の関係が始まる。逢瀬にマイケルは、ハンナに請われて本を朗読する。ハンナは、今は路面電車の車掌をしているが、彼女には大きな秘密があった。その秘密を誰にも打ち明けることができない。ましてや少年マイケルには明かすわけに行かない。半年ほどの交際の後、ハンナは突然マイケルの前から姿を消す。マイケルは打ちのめされるが、いつか忘れて大学生になる。時は 1960 年代後半、世界中で学生運動が吹き荒れていた時代、ドイツでは親世代のナチズムへの関与の追求という形を取る。ナチス戦犯の裁判傍聴というゼミに参加していたマイケルがその法廷でハンナに再開することになる。かつて強制収容所の看守であったことがハンナを苦しめていた秘密である。いまひとつの秘密は、彼女が文盲であったことである。文盲であるということを恥じて、人に知られることを極度に恐れるハンナは、秘密が知られそうになるたびに職業を変えることになる。車掌から内勤へ昇格をほのめかされたとたんにハンナは車掌の仕事もマイケルも捨てて逃げ出す。かつて戦時中、ジーメンスで働いていて、やはり昇任を寸前に、SS の募集に応じたのであった。ハンナは確信があって SS に入隊したのではなく、逃避として強制収容所の看守になるわけである。この裁判でも、ハンナが文盲であることを明かせず、不当に重い終身刑という判決を受けることになる。マイケルは、自分にふさわ

[1)]東京都立産業技術高等専門学校　ものづくり工学科

しい年齢の女性と適切な関係を結ぶことができない。いつまでもハンナのことが忘れられないのである。若い娘が目の前にいても常に心の中にはハンナがいるからである。結婚し、娘ができても、数年後離婚することになる。やがてマイケルは, かつてハンナに請われるまま朗読してやったように、さまざまな本を朗読したカセットテープを獄中のハンナに送ることになる。ハンナはマイケルの送ってくれたカセットを聞いて文字を覚え、本を読めるようになる。文盲を克服するわけである。ハンナは 18 年の収監の後、恩赦によって出所することになる。その出所の日の朝、ハンナは自殺するのである。やっと外の世界に出て行けるというその日に、ハンナは命を絶つのである。この小論の問いは、なぜハンナが自殺するのかということである。

２．ハンナの罪

ハンナの罪は、いかなるものであろうか。マイケルのゼミの教授の定義によれば、「アウシュヴィッツで働いていたということだけでは罪に問えない。殺人は殺意を証明しなくてはならない。しかも、現在ではなく、当時の法律で違法かどうかが問題である。」ハンナが看守としてガス室へ送られる女囚を選別していたことと、死の行進に関わっていたことが、裁判の争点になる。

ハンナはアウシュヴィッツの支所で働いていた。支所には 1200 名の女囚がいて、毎月 60 名の新しい囚人がアウシュヴィッツから送られて来て、労働に耐えられなくなった 60 名の囚人が送り返された。アウシュヴィッツで待っていたのはガス室であった。それを知りながらどの囚人を送り返すか、看守たちが決めていた。6 名の看守がいて、一人 10 名ずつ選んだと告訴状にある。ハンナは、女囚の中で体の弱そうな少女を選んでは、つらい昼の作業を免除してやり、夜には自分の部屋に呼んで本を読ませていた。ハンナが虚弱な娘を守ってあげるというなら、生きている限り手元においてやればいいはずだが、ハンナは一定の期間が過ぎれば、「もうアウシュヴィッツへもどりなさい」と娘たちに命じた。それはガス室送りになるということだということを、娘たちは知っていた。そしてまた別な娘がハンナの部屋に呼ばれて本を読まされることになる。送り返す囚人を選んでいたという点では 6 名の看守は同じ罪に問われているが、ハンナが裁判官に強烈な心象を与えた点で不利になる。裁判を傍聴するマイケルは、もしアウッシュヴィッツが今でもあれば、ハンナが文盲だと気づくころには、自分もアウシュヴィッツのガス室へ送られたのかと思う他はない。ハンナが、文盲であることを人に知られることを、ユダヤ人を死に追いやることよりも重大な事と考えたことが、ハンナの罪である。[2)]

死の行進とは、対戦末期、迫り来る連合軍に対しドイツが強制収容所の存在を隠すため、収用されていた人々を東部からドイツ国内に移送し始めたその行進のことである。移送は混乱を極め、北に進むかと思えば、翌日には南に変更され、また翌日には北に向かうというほどであった。行進に遅れるものは容赦なく射殺された。ドイツは初めは建物を破壊し、死体を掘り返して焼却し、更地に戻してドイツに逃げ帰ろうとした。戦局が悪化するにつれて収容所が撤収されて数時間後に連合軍が収容所に到達することもあった。ハンナたちの強制収容所でも移動が始まる。ハンナたちの一隊が、東部から西のドイツを目指して進む。ある晩教会に宿をとることとなる。空襲があり、教会が被弾し、燃え始める。なぜ外からドアを開けて、女囚を助けなかったかと問われる。ハンナは命じられたことを忠実に行うことしかできない。混乱の中、指揮官も護衛の兵隊も逃げ出した状況でドアを開けることは考えられなかったであろう。法廷でハンナが、法廷戦術に疎く、あまりに正直に質問に答えるので、他の被告たちから責任者に仕立て上げられ、事件の報告書を書いたものとされる。ハンナは文盲であることを恥じて、自分は文盲ゆえ文書をかけるはずがないと主張できない。その結果、実際以上の罪を認めてしまうことになる。

ハンナとマイケルの最初にして最後の面会のシーンを見てみよう。マイケルは刑務所長の「ハンナに会いに来てほしい」という希望に応えないでいた。所長としては、長い刑務所暮らしの後には、社会に溶け込めるまで、そばにいて、支えてやる人が必要だとわかっているのである。マイケルは容易にハンナに会おうとしない。それどころか、ハンナが字を覚え、必死で書いてよこす手紙に返事すら出そうとしない。よく読みもせずにレター・ボックスに放り込んでおく。なぜであろうか。「ぼくは彼女を小さな隙間に入れてやった

[2)]di Bartolomeo,C., : Die Täter-Opferrolle von Hanna in Bernhard Schlinks “Der Vorleser”, GRIN Verlag, Norderstedt,p9,2003

だけだった。その隙間は僕にとって重要だったし、僕に何かを与え、ぼくもそのために行動はしたが、隙間は隙間であって、人生の中のちゃんとした場所ではなかった。」(S.187) ゼミの学生との討論の中で、元看守たちのことを「理解してやるんだ」といったマイケルだが、果たしてハンナのことを理解していたのであろうか。ハンナの答えは否である。「私はずっとどっちみち誰にも理解してもらえないし、私が何者で、どうしてこうなってしまったかということも、誰も知らないんだという気がしていたの」というハンナは、さらに続けて言う。「誰にも理解されないなら、誰に弁明を求められることもないのよ。裁判所だって私に弁明を求める権利はない。ただ、死者にはそれができるのよ。死者は理解してくれる。その場に居合わす必要はないけれど、もしそこにいたのだったら、とりわけよく理解してくれる。刑務所では死者たちがたくさん私のところにいたのよ。私が望もうと望むまいと、毎晩のようにやってきたわ。裁判の前には、彼らが来ようとしても追い払うことができたのに。」(S.187) 死者だけがハンナの過去の行為の弁明を求めることができる。つまり、どうして私たちを死に追いやったのかと、死者の霊がハンナに迫って、ハンナは大いに悩まされているというのである。しかしこのことがマイケルに伝わらない。この時点に及んでもマイケルはハンナを理解できないのである。

ハンナに対するマイケルの思いは複雑である。さらに物語をさかのぼってみよう。マイケルはずっとハンナのことを両親や友達に紹介しようと思っていた。うまく切り出す機会が見つからないまま、月日が経ってしまう。マイケルはずっとハンナに悪いことしていると感じている。ハンナに会う最後の日、クラスメートのところに戻ったマイケルは遠くにハンナの姿を見る。声をかけようかと迷っている間にハンナは消えてしまう。ハンナに対する疚しさから見た幻である。自分がハンナのこと皆に秘密にしていたので、ハンナは身を隠したのだとマイケルはずっと思っている。法廷の場で、ハンナは全く別な理由で姿を消したということを知る。

ハンナをマイケルが理解するにいたるのは、ハンナが自殺した後に、所長の口からハンナの日々の生活を聞かされた時である。ハンナは刑務所に入ってマイケルの送るカセットの助けによって読み書きを覚える。ハンナはすぐに強制収容所に関する文献を読み始める。刑務所長の言うところでは、「字が読めるようになってから、シュミッツさんはすぐに、強制収容所についての本を読み始めたんです」(S.194)ということであった。字を読めるようになって初めて自分がしたことの意味がわかるようになったわけである。

「プリモ・レヴィ、エリ・ヴィーゼル、タデウシュ・ボロフスキ、ジャン・アメリー・・・ナチの犠牲者たちの本と並んで、ルドルフ・ヘスの伝記や、エルサレムでのアイヒマン裁判についてのハンナ・アーレントのレポートや強制収容所についての研究書もあった。」(S.193) あるいは、「強制収容所にいた女性たち、囚人や看守たちについての本を教えてほしい」(S.194) と所長に聞いていた。ハンナは、文字を覚えると同時に自己の過去の行為の意味が理解できるようになる。初めて正義と不正ということも考えることができるようになる。文盲の克服は、自己の過去に対する文盲の克服、道徳的な文盲の克服となるのである。[3]

ハンナは、これまで抽象的思考ができなかった、というより、文盲の特徴であろうか、考えるということがまったくできなかった。目の前に生起することに反応するだけで、なぜそうなるのかということを考えることができなかった。こう言えば周囲はどう反応するかといったことを、予想することもできなかった。それ故に、就ける職業も限られていたし、法廷でも不利な立場に追い込まれる。正に、文字を覚えることは、「未成熟から成熟へと一歩踏み出す」(S.178)ことだったのである。ハンナの元の部屋には本棚がなかった。独房の中には本棚がある。大きな違いである。

それと共に、刑務所の中での行動も変わる。マイケルが「彼女はずっとどんな様子だったんですか」問うと、刑務所長は、「長いあいだ、修道院にいるような生活をしていましたね。まるで自発的にここに来たかのように。ここの規則にも自分から進んでしたがっているようでしたし、いささか単調な仕事も彼女にとっては瞑想の一部のようでした。――それまでの彼女はいつもきちんとしていて、骨太ではありましたが、スマートで、徹底した清潔好きでした。ところが彼女はその後たくさん食べ始め、めったに身体を洗わなくなり、肥満して匂うようになりました。でも、不幸だとか不満だったわけでないようでした。たぶん、修道院にいるだけでは足りなくて、修道院の中でさえ仲間ができたりおしゃべりになったりするので、もっと孤独な庵へ、もう誰からも見られず、外見や服装や体臭などが意味を持たない世界へ引きこもらなくてはならな

[3])Greese, B., Peren-Eckert, A.,: Einfach Deutsch Unterrichtsmodell Bernhard Schlink Der Vorleser, Schöningh Verlag, Paderborn, p81,2010

い。ということだったでしょう。」(S.196ff.)

数年後、面会の場でマイケルはハンナに出会うのである。マイケルと初めに会った頃、ハンナはきれい好きであった。しきりに手を洗い、洗濯をし、アイロンをかける。あの清潔好きは、特にマイケルを惹きつけた点であった。それが麗しい体臭となってマイケルの記憶に残っている。今、ハンナは老いて、しわの刻まれた顔になり、老人特有の臭いを放ってマイケルの前に現れる。ハンナの外面的な変わりようにマイケルは驚く。若い時のハンナの匂いを思い出し、マイケルが呪いと呼んだこの臭いを発散するようになるには、ハンナはまだ若すぎると思う。殺人を犯した者は、無意識のうちに手を洗うという。ちょうどマクベス夫人のように。彼女は自己の過去と向き合おうとせず、過去を隠そうとすることから、過度に身奇麗にしようとする。罪悪感から身を綺麗にしようとするのである。自己の過去の行いの罪深さを認識できないまま、無意識に隠そうとするわけである。文字を習得し、本を読めるようになり、自分の関わった強制収容所に関連する本、特に強制収容所の被害者の書籍を読むに至り、自己の罪を知る。自分が何をしたのかその意味がわかってくる。その頃から自分の身を綺麗にするという習慣が終わり始める。熱心に身体の手入れをすることを放棄したということは、自己の過去と罪を認識し、その事実を受け入れたということである。

３．何故ハンナは自殺するのか。

ハンナの肉体的な衰えは、死が近いことを暗示する。マイケルと交わされる言葉、「自分の周りにいる人間は自分を理解していない。だから釈明を要求する筋合いはない。刑務所にいて彼女に付きまとう死者だけが自分を理解してくれる。だから自分は死者に対してだけ責任がある。」そのようなハンナの言葉もハンナの死の願いを表している。

ハンナの自殺の考えられる動機は次のようなものである。強制収容所の犠牲者たちの本を読んだことで、自己の罪、自分が過去に何をしてきたのか、その意味を知る。自分の罪の重さを知っている。彼女は何も償うことができない。ハンナは社会、生者の前に出て行く気になれない。ハンナは社会の中で、何かをしたいという希望も持ってはいない。この修道院を出る理由がない。ここに留まる方が自分にふさわしいと感じている。

マイケルの助けがあれば、あるいは社会復帰は可能であったかもしれない。マイケルはハンナが社会復帰するために当面必要な人物である、マイケルは、ハンナと外の世界をつなぐ人物である。刑務所と社会の架け橋になる人物である。マイケルの拒絶的な態度にハンナが傷ついたのは確かであるが、マイケルに拒絶されたからといって、自殺するほど絶望するとは思われない。それは引き金になったのであり、主たる理由ではない。

ハンナは刑務所長に一種の遺書を残す。マイケルが、ハンナが刑務所で働いて得たお金を教会の火災を生き延びたあの二人のユダヤ人母娘に渡してくれるようにと定めてある。弁償なのか罪を許してくれというのか、ここでもハンナの動機は不明である。

ニューヨークでの、生き残りの娘との出会いは重要である。名を挙げることなく、強制収容所、死の行進そして教会の火災を生き延びたユダヤ人の娘としか示されないのも暗示的である。無数の犠牲者の一人ということであろうか。自分が監獄で働いて得たお金をユダヤ人のために使ってほしいという、ハンナの遺志をもってマイケルは娘さんに会う。初めはマイケルの話を聞こうとしない娘も、マイケルとハンナの個人的関係を知るに及び、マイケルの話しを聞く気になる。お金の受け取りは拒否するが、ハンナの名前で識字率を向上させるためのユダヤ人団体に、ハンナの名前で寄付することを認めるというのは、ハンナの罪を許さない、しかし収監後のハンナの心の軌跡を認めるということである。ハンナの贖罪が認められるのである。

その後、マイケルは実の娘に自分の過去を話せるようになる。長年秘密を抱えて、誰にも打ち解けない性格がここで氷解し、やっとマイケルは他人との交流を始めるのである。

テキスト

Bernhard Schlink Der Vorleser Roman Diogenes Verlag AG Zürich 1995, 引用は松永美穂氏訳を拝借した。

参考文献

[1] Collins Donahue,W.,： Holocaust Lite, Aisthesis Verlag, Bielefeld , 2011

[2] Teusch, S.,：Genauere Betrachtung des Romans - Der Vorleser – von Bernhard Schlink, GRIN Verlag, Nordersted, 2001

[3] Ostermann, M.,：Aporien des Erinnerns - Bernhard Schlinks Roman der Vorleser, Verlag Marcel Dolega, Bochum, 2004

[4] Moschytz-Ledgley, M., 2009：Trauma, Scham und Selbstmitleid - Vererbtes Trauma in Bernhard Schlinks Roman "Der Vorleser" -, Tectum Verlag, Marburg, 2009

[5] リヒャルト・フォン・ヴァイスゼッカー　永井　清彦訳、: 新版　荒れ野の 40 年、岩波書店. 2009

[6] ハンナ・アーレント、大久保　和郎訳、新装第３刷　: イェルサレムのアイヒマン、みすず書房、1997

[7] ロバート・ジェラトリー、根岸　隆夫訳、 : ヒトラーを支持したドイツ国民、みすず書房, 2008

[8] 井関　正久、:ドイツを変えた 68 年運動、白水社, 2005

[9] ポール・ジョンソン、石田友雄訳、: ユダヤ人の歴史　上下、徳間書店、1999

[10] ホルクハイマー、アドルノ、徳永恂訳、: 啓蒙の弁証法、岩波書店, 2007

[11] ハンナ・アーレント、大久保　和郎訳、: 全体主義の起源、みすず書房、1974

[12] ニーアル・ファーガソン、仙名　紀訳、: 憎悪の世紀　上下、早川書房、2007